豊橋市議会傍聴記 ㊦

地方政治クリエイト 伊藤 秀昭

おしゃれになってきたまちなか

◆来年度予算

坂柳泰光氏（自民）は議論の中でさらなる自主財源確保に向けた考え方を聞いたが、財務部長は「ふるさと納税」の見直し、自主財源確保のために公民連携の仕組みづくりなどでさらなる確保につなげたいとした。

坂柳氏は中長期的には社会保障関係費の増大や、公共施設の老朽化対策、中心市街地での大型投資事業も予定され右肩上がりで予算規模が膨らむとして、メリハリのある財政の舵（かじ）取りを要請した。

◆文化芸術のまちづくり

穂の国とよはし芸術劇場の開設3年間で、まちなかがにぎわい、おしゃれになってきたと議論を展開したのは松崎正尚氏（自民）。

松崎氏は自ら劇団に所属し活動していることから、文化芸術の必要性を市民に理解してもらうには時間がかかるが、継続してまちなか活性化につなげていくことの重要性を訴えた。

また市民はなぜ「豊橋市歌」を歌わないのかと問題提起し、「豊橋育ちはみんな豊橋市歌を歌える文化を形成すべき」と主張したが、いい提案だった。

◆ユニチカ跡地開発

鈴木道夫氏（自民）はユニチカ跡地は準工業地帯であり、住居系の周辺地域との調和を図り、住環境を守ることや、周辺道路の整備、特に弥生町線の整備を要請した。

また開発に伴う大雨・洪水対策や緑の保全、また、土壌汚染などへの環境対策についても言及した。

25年前から「南部地域を考える会」が結成され、鈴木氏はそのメンバーとして、現在はそのリーダーとして南部地域のまちづくりに取り組んできた経験から、その発言は説得力があった。

27㌶の広大なユニチカ跡地に新しいまちが誕生していく。注目したい。

◆女性消防吏員

沢田都史子氏（公明）は女性の活躍推進が進められている中で、地方自治体に求められている女性消防吏員の登用について取り上げた。

消防長は現在12名が所属しているとして、より多くの女性消防吏員が活躍できる職域の拡大が必要であるとした。

沢田氏は、救急搬送患者の半分は女性であることからも女性救命救急士の全消防署所への配置を要請し、女性が働く豊橋市消防本部を強調したが、女性議員ならではの議論だった。

◆介護職員の処遇

斎藤啓氏（共産）は、今年度からの介護報酬改定による市内の介護施設の経営状況と、介護職員の処遇について議論した。

福祉部長は「介護スタッフの確保が困難との理由で開所できていない事業所が4事業所あると明かし、昨年度は17事業所、今年度は5事業所が撤退した」と答え、介護現場の厳しさを示した。

今後、2025年には全国で38万人、豊橋でも約3000人が不足するといわれ、全産業平均と比べると月10万円近くの差がある介護職員の安月給が人材確保に立ちはだかっている。

根本的な対策は急務である。

◆人生の寺子屋

川原元則氏（無所属）は33年間の高校教員の経験から、特に東北へのボランティア活動を通じて子供たちが高齢者にやさしくなる姿を目の当たりにし、「地域の人材資源は多くのことを学べる人生の寺子屋である」とし、外部の人材を生かした学校教育の取り組みについて取り上げ、飯村市民館で継続されている東部コミュニティ大学の文化体験講座を紹介した。

一般質問は人生体験発表の場ではないのだから、川原氏には経験を具体的な政策施策に組み上げることを期待したい。

◆風水害対策

伊藤篤哉氏（自民）は、昨年広島での土砂災害、今年9月の鬼怒川堤防決壊のような災害は全国どこでも起こりうるとして、その教訓を生かした水防への取り組み、災害情報の伝達、避難の考え方、被害を軽減させる対策などについて質問した。

危機管理監や建設部長は、豊川、豊川放水路においても同じような災害が起こる可能性があるとして、迅速かつ正確な情報伝達や隣接市への避難について検討する必要性や、「内水ハザードマップ」を検討していることなどを答弁した。

伊藤氏は風水害被害に対する総合的なハザードマップの必要性、罹災（りさい）者へのワンストップ窓口設置などを要請したが、的確な提案だった。

◇

3日間、21人の一般質問を通じて、今春当選した一期生議員が成長している姿を頼もしく感じた。